

## アナウンサーになるために、 目指したのは「人間力」を磨くこと。

就職活動シーズンだが、目標の会社に入社したり、目指す職業に就くことは容易ではない。上田まりえさんがアナウンサーになりたいと思ったのは、小学生の頃。以来、あきらめない、他人と同じことをしないなど、自分の信念を貫き通して、ついに実現させた。

**「みんなで一緒に」には、  
参加しませんでした。**

アナウンサーになりたいと、小学生の頃から思っていました。ただ、アナウンサー試験を受けるための準備は、何もしていませんでした。大学のアナウンサー養成講座で、「みんなで練習しようよ」と誘われても、絶対、参加しませんでした。「みんなで落ちようよ」と、私には聞こえなかったからです。そうした点は、自分の信念を曲げませんでした。アナウンサーとしての技術は入社してから学ばばいい、入社試験では必要ない。就職活動では面接のテクニックよりも、「人間力」を高めることが大切だと思っていました。

就職活動の準備として私がしたことは、野球を見に行き、野球を勉強した……。それだけです。そこから野球のことはもちろんですが、野球に取り組む姿勢などを教わりました。「アナウンサーになる」という思いが、夢から目標に変わったのも「プロ確実」と言われていた学生野球の選手の言葉が、きっかけでした。大学1年の冬、たまたま話をする機会がありました。憧れ

の人でしたので、すごく緊張しながら、「アナウンサーになって、将来、取材したい」という話をしたら、「まずは俺がちゃんとプロに行かないとな。それでいい成績を残して待っているから、頑張れ!」と言われました。「プロ確実」と言われている人なのに、「まずはプロに行かなくては」という謙虚な姿勢に驚いたのと同時に、自分のアナウンサーを目指す姿勢を見直しました。その人に出会っていなければ、きっと私はアナウンサーになれなかったと思います。

その頃から私は、初対面であろうと、会う人会う人に「アナウンサーになりたい」という思いを伝えるようにしました。「言霊」というのは、本当にあるもの。思いを口にすることで自分の考えも整理され、それが自然と面接の練習にもなっていたように思います。

**人の生き方を変えることも……。やりがいのある仕事。**

アナウンサーの仕事はニュース原稿を読むだけではなく、ナレーション、番組やイベントの司会などへと広がっています。大切なのは、本番前やインタビュー前の事前の準備です。先輩アナウンサーからは、「準備が8割」とアドバイスされました。放送されるのがほんの数分でも、情報・資料の収集など準備をおろそかにすると、質の高

### 上田まりえ

日本テレビ  
アナウンサー

うえだ まりえ ●2009  
(平成21)年、文学部日本語日本文学科卒業。  
1986年生まれ。鳥取県出身。趣味は何かをつくること、カラオケ、バッティング。モットーは「人と過去は変えられないが、自分と未来は変えることができる」。



い番組はできません。「箱根駅伝」でもコース約110kmを数日かけて実際に歩き、体で覚えます。

テレビ放送の裏側では大変なことが少なくありませんが、励まされるのは家族の応援や視聴者の方々などからの手紙です。「専修大学創立130年の集い」では、司会をさせていただきましたが、後日、学生さんからお礼の手紙をいただきました。普段、手紙を書いたことのないような感じの文面や便箋で、しかも鉛筆書きでした。でも、すごく丁寧に、便箋2枚いっぱい書かれました。その方ももう卒業されていますが、当時は駅伝の選手で怪我をして走れなくなり、あきらめようと思っていたそうです。4回目の手術をすることが決まっており、私が会場で話したアナウンサーを目指した経緯を聞いて「手術を控えています、僕もあきらめないうちで、やってみようと思います。逃げないで、頑張ります」と書かれました。会場の方の質問に答えた短い話でしたが、それを受け止めてくれた人がいたことは驚きでしたし、うれしかったですね。また、身の引き締まる思いと、やりがいを感じました。(談)



学生時代の2007年3月からつけている野球ノート。思い出がいっぱい詰まった宝物。